

【年金記録問題の原因】

今年に入り、“年金加入記録漏れ五千万件”や“宙に浮いた年金”など年金制度に関する問題が大きく取り上げられ、一時は社会保険事務所の年金相談コーナーに長蛇の列ができましたが、現在は少し落ち着いたようです。

先日、「年金記録問題検証委員会」が発足され、その原因と背景が報告されました。問題点は多数あるのですが、まず大きな原因のひとつは組織の人事面での問題。かつて職員の身分は国家公務員でその人事権や経費負担は国にあったのですが、一方日常の具体的な業務内容の指図は都道府県知事が行っていたため「指揮命令系統のゆがみ」が問題視されて2000年に廃止されました。しかし、慣習はぬぐえず現在まで問題は解消されておられません。また、組織面では厚生労働省のキャリア官僚、社保庁採用の中堅職員、地方で採用される職員の「三層構造」が存在し、人事が閉鎖的な地方職員が実務を担う一方で、ごく短期間で現場を離れて厚労省に戻るキャリア官僚の間には適正な組織管理が行えず、「それぞれの現場では独自の判断で、全体との連携を欠いた事務処理を行うようになっていた」ことが明らかになりました。

さらに、職員の仕事に対する意識の低さから、加入者自身が年金請求のときに記録を確認すればよいという安易な姿勢が蔓延し、“国民の権利を守る”という職務に不可欠な自立精神が欠如していたことも原因のひとつにありました。

またオンライン化に反対する闘争をし、「45分操作15分休憩」など業務改革に後ろ向きな多数の覚書を結んだ労働組合の影響もあったことや、事務処理システムを統計分析や業務管理の用途まで十分に考慮して設計せず、ソフトの更新をせずに旧式のまま使い続けたことが問題を大きくした一因であることも露呈しました。

上記以外にもたくさん問題点はあるのですが、やはり一番大きなものは組織管理。今回の問題は公務員という特別な事情はあったにせよ、どこの会社でもおこる問題であると思います。エリート街道を進む管理職と一般職との問題、営業と製造現場の問題など。怖いのは組織上のストレスが発生すれば、2次3次と厚生労働省のように問題が派生し、上の知らない間に下が本来進むべき方向と反対に進んでしまっていること。指揮命令系統を明確にし、組織のストレスが起こっていないか定期的に確認してみてください。

